

大阪府済生会中津病院における 新型コロナウイルス対応・

ワクチン接種

大阪府済生会中津病院 院長 川 嶋 成乃亮

令和3年は、令和2年以上に新型コロナウイルスへの対応に追われた年でした。令和3年1月ごろまでの当院の新型コロナウイルス対応については、すでに本会誌第155号にて、私なりに当院感染管理室長の安井が、それぞれの報告をさせていただいています。今回はそれ以降の新型コロナウイルスに関しての当院の動きを述べるとともに、令和3年3月から始まったワクチン接種に対する当院の取り組みを報告したいと思いません。

【新型コロナウイルス感染症対応】

令和3年1月、2月にかけて、当院は新型コロナウイルスの院内感染に苦しみました。多くは入院時には判明していなかった患者さんからの持ち込みによるものですが、職員の家庭内感染と思われるケースもありました。そのため一部の診療、特に救急や入院診療を制限せざるを得ないこともあり、日頃患者

さんをご紹介いただいている診療所等の皆様にはご迷惑をおかけしました。一方、体制の整備に努めていた全入院患者に対する入院前あるいは入院当日のPCR検査が、3月から開始できるようにになりました。当初は処理能力にまだ制限があり、一部を外注化していましたが、5月からは多数の検体の同時測定が可能なPCR測定器の新機種が稼働し始め、全て院内で検査を行いました。かつ検体採取から2時間程度で結果を出せるようになりました。令和2年の夏頃から抗原検査やランプ法の一つであるTRC法によるスクリーニング並びに、対象を絞ったPCR検査は院内で行っていましたが、精度という点で勝るPCR検査を、すべて院内で、かつ迅速に行うことができるようになったのは大きな進歩です。ちなみに令和4年1月からの第6波では、1日あたり300件以上の院内PCR検査を行っています。

このような検査体制の充実と合わせて、同じ頃から始まった職員へのワクチン接種の効果により、その後4月に起こった流行の第4波に対しても、院内感染をおこさず、多くの患者の入院診療に当たることができました。しかしながら第4波はどこかの病院でもそうであったかと思いますが、本当に大変で、次から次へと重症患者が入院してきました。当院ではCOVID-19の入院診療は、通常は呼吸器内科医師が対応してきましたが、第4波においてはそれではとても対応できず、内科全診療科で対応しました。

そして5月に入り第4波が収束していったわけですが、7月になるとすぐに第5波がやってきました。第5波に際し、当院は大阪府からの要望に答え、重症患者受け入れ枠数を増やすこととしました。前年度には、特定集中治療室8床を減床させ、CCU3床と、コロナ用陰圧室のRCU3床との分離工事を行っていましたが、さらに隣接する一般病室を改築し、陰圧個室化したRCUを計7床に増設しました。このような体制で第5波に対応しましたが、第4波時よりも大阪府下の受け入れ病床数が大幅に増えたこともあり、重症個室は満床になることはなく、第5波を乗り切ることができました。

一方、軽症COVID-19患者は自宅待機・療養の対象となりましたが、それらの患者の状態把握が充分ではないことが問題となってきました。第4波の後期の5月の時点で、近隣のどこの訪問看護ステーションもコロナ患者への訪問を行っていないかったため、当院から訪問看護師を派遣させることとしました。担当看護師には不安感があったかとは思いますが、病院附設型の訪問看護ステーションである強みを生かして、北区医師会の先生のご協力の下、COVID-19罹患患者宅への訪問看護を行いました。そして第5波では自宅療養せざるを得なくなった患者の増加とともに、訪問したCOVID-19罹患患者数も大幅に増え、非常に感謝されました。

【ワクチン接種について】

当院では令和3年3月10日より病院職員に対して、ファイザー製のワクチンの接種をはじめました。第一陣は医師ならびにコロナ患者に対応する看護師からはじめましたが、漸次すべての希望する職員へと対象を広げていきました。また、4月に他の病院へ異動することが決まっている医師を始めとした職員には、3月中に2回目接種が終了するように配慮しました。3月末の時点での職員の1回目接種率は91・5%でしたが、当初、種々の事情でワクチン接種を控えていた職員も次第に接種を希望するようになり、令和3年11月末の時点での当院職員の接種率は94%となっています。

ワクチン接種に際しての副反応に関し、2回目接種終了者を対象としたアンケート調査を行いました。その結果ですが、アナフィラキシーを起こしたものはおらず、数名に迷走神経反射がみられたのにとどまりました。1回目接種後の副反応としては、接種部位の痛み・腫れ・筋肉痛という局所症状が多く、2回目接種後には、局所症状に加えて、半数以上の者に疲労・倦怠感、頭痛、発熱が出現していました。37度以上の発熱に関しては、1回目では5%に、2回目では19%に出現し、疲労・倦怠感に関しては1回目では20%に、2回目では63%に認められました。このために、被接種者の13%が予め接種日の翌日に休みをとっており、加えて17%が接種後1日以上以上の欠勤となつて

います。すなわち2回目接種においては約30%の者が、翌日休む事となりました。加えて薬剤を服用しながら翌日勤務にあたった職員が19%に認められました。

職員への接種と並行して、北区医師会の方々を始めとする外部医療関係者に対するワクチン接種を、4月より開始しました。予約受付並びに接種を健診センターにて行い、一部の方々には9月まで接種を行いました。ほぼすべての方々の2回目接種は7月末で終了し、総数は475名となりました。

引き続き6月はじめより、当院の通院患者さんを含む地域の一般の方々へのワクチン接種の開始に着手しました。大規模接種を想定していただきましたので、接種場所と待機場所の広さを考え、西棟13階の看護学校体育館で行うこととし、看護学校が夏休みに入る7月からの開始としました。当初は月曜から金曜まで1日あたり300名程度を受け入れる予定で、予約専用のコールセンターを設け、当日は4枠のブースを用意し、各々の接種担当医師に加え、受付担当者、予診担当者、健康観察者、更には密にならないよう混雑を避けるための案内係など、1日あたり総勢20名強の多岐にわたる体制を敷いていました。

しかしながら、いざ始めようとするとワクチンの供給不足の問題が起こってきました。7月5日以降ワクチンの供給が途絶え、7月7日には、大阪市より7月12日以降1回目接種を行わないよう求める通知がありました。そのため6月に納品されて

いたワクチンを用い、7月12日から3日間で180人に1回目ワクチン接種を行ったのとどまりました。その後8月上旬より、少量ではありますが供給が再開されたので、再び8月17日より、1回目接種を再開し、9月8日までさらに895名の方に1回目接種を行いました。しかしながら9月に入ると新たな接種希望者数が激減しましたので、9月末で体育館での接種をやめ、また接種対象者も狭め、基礎疾患を持っていたり、アレルギー歴があるため診療所での接種がしにくい、などの限られた方々を対象とした健診センターでの接種に切り替えました。

このように、一般の方々を対象とするワクチン接種は、人数的に想定したよりもかなり希望者が少なく、9月を過ぎると希望者が著減したため、当院は、病院ならではの新型コロナウイルス感染症への対応、すなわち、できるだけ多くのCOVID-19の診断と治療に当たることに注力すべきと考えました。そして前述のように、コロナ対応病床数を増やすとともに、早速10月から抗体治療を開始し、さらには、自宅療養者に対する訪問看護を強化しました。